

ハイテンション↑バ
カップル

アサルトゲーマー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある地区のとある学校！

そこには頭の悪いカップルがいた！

目次

雨には負けず 赤には勝てず | 1

素直さやひたむきさ MAX END

8

しなびたエリンギ | 16

そして女の名は茄鳴須 奈央。長いウルフヘアが自慢のパワフル少女だ。綺麗にセツトした髪をベチャベチャに濡らしながら翔の隣を並走している。

「奈央って割とバカだよな！俺が傘持ってくるわけねーじゃん!!」

「翔さんこそおばかですよ！こんな可愛い子との相合傘チャンスを棒にふるなんて！」

「一緒に雨に打たれながら帰るのもアリだろ！」

「アリかナシで言えば断然アリですね!!」

うひゃっほーうー！と奇声をあげながら水煙に消えていく男女。多少頭のねじが緩んでいるものの、その仲はととてもとても良いものだった。

「おーい奈央！」

「なんですかー!?!」

「風邪ひいたら看病してくれー！」

「あ、じゃあ私もー！」

「オツケー！」



「全然風邪とかひかなかったわ!!」

「私たちは元気のパワーにあふれてますからね!!」

次の日。普通に登校した翔と奈央は朝っぱらからテンションが高かった。

馬鹿は風邪を引かないとか言うけれども、この二人に限っては元気が有り余っているだけだろう。

「そーいや今日テスト返ってくる日だったよな! 奈央は自信あるか!？」

「そりやもちろんですよ! 翔さんはどうですか!」

「補習の準備…できてるぜ!」

「バーカ! 翔さんのバーカ!」

「うるせー! 奈央に赤点あつたら笑ってやるからな!」

「ふっ…赤点常習の翔さんならともかく私がそんなポカやらかすわけがないでしょう!」

「赤点イエエエエエエエエエエエエー……ッ!!」

「補習イエエエエエエエエエエエエー……ッ!!」

!!
回答欄のズレには勝てなかった奈央と普通に赤点を取った翔の壮絶な補修が始まる

「はいじゃあ補習を始めますよっ」と

禿げ頭の先生のけだるげな声。それに反応した奈央と翔はピッと背筋を伸ばした。

「先生……」

「なんですかな」

奈央がバツと手を上げて勢いよく質問する。

「私は解答欄間違えただけなので先生の恩情的なアレコレで補習の免除とかできませんか……」

「できませんよ。一応決まりだからね」

「先生の恩情家！いけおじ！」

「褒めてもだめだからね」

「じゃあ真面目に聞きます！」

「ノートも取ろうねー」

「今先生の外堀固めが熱い!!!」

「静かにしようねー」

「……………!!」

「はいそこ、顔がうるさいよー」

抵抗もそこそこにやりこめられた奈央は変顔マシーンと化した。そんな彼女を見て翔はふつと息を吐く。

「ふふふ…所詮は同じ穴のムジナ…！俺と同じ補習を味わうといい…！」

「灰天くんは赤点多いからスペシャルな奴を用意してるよ」

翔の顔からさつと血の気が引いた。そんな彼を見て奈央がぼんと肩を叩く。

「……………!!……………!!……………!!」

「何か言えし」

彼にほっぺをぐりぐりされても先生の言うことをしっかり守る、よい子の鑑の奈央である。

しかしそんな二人に光が差す！翔が天啓を得た顔で空を見上げたのだ！

「いや、違う……！食べさせあいつこするのに口実なんていら……！」

「な、なんですって！翔さんは天才ですか!?!」

「よつしや奈央！食べさせあいつこするぞ!!」

「がつてんです！……あれ？」

奈央がアイスのカップを覗く。そこにはプラのスポーンが一つ入っているだけ。

「……」

「奈央……おまえ……」

「…………てへ。全部たべちゃいました」

翔がわなわなと震える。そして自身のアイスから一口分をスポーンに掬い、彼女に突き出した。

「餌付けイエエエエエエエエー……ッ!!」

「許されたイエエエエエエエエー……ッ!! もがもが」

彼と彼女はいつも仲良し。

に近づいて行く足音が一つ。

「おーっほっほっほ!!金欠とは情けないですわねお二方!」

金髪巻き髪お嬢様のエントリーだ!彼女は御鐘 望子、ナンカスゴイカンパニーのご令嬢である!

「モッチー!」

「望子ですわ!貧乏でいらっしやる貴方たちのためにお仕事を持ってきましたわよ!」

「ありがとうございますモッチーさん!」

「望子ですわ!」

ペシーンとバイト求人誌の上に重ねられたパンフレットは遊園地のもの。はてこれは?翔と奈央は首を傾げた。

「うふふふ…貴方たちには園内のヒーローショーに出演していただきます!」

「そこまでだ怪人ども!!お前たちの悪事は僕たちモモタロウ戦隊が許さないぞ!!いくぞみんな!!」

「ワンワン!!」

「……。きじきじー!!」

「えっ?……。サルサルー!!」

「ぶつつけ本番大失敗イエエエエエエエエエエエー……ツ!!」

「キジの鳴き声まつたくわかりませんでしたイエエエエエエエエエエエエー……ツ!!」

遊園地のバイト当日。そこには愚かな敗北者たちが居た!!

「なーをやっておりますのお婆かさん!雉の鳴き声は『カー』や『ケーン』でしょう!」

「ごめんね!!!」

「でもまあ翔様のフォローはなかなかよかったですわね！今回はそれに免じて減給はなしにしてさしあげます！」

「モッチーさんの美人！雅量！ゴージャス巻き髪！」

「おーっほっほっ！褒めても賃金は等倍ですわよ！」

上機嫌な望子から渡されたひとつずつのポチ袋。二人は顔を見合わせて袋の中を覗いた。

「…あれ。モッチーさん、これって」

奈央が袋から紙幣と共に取り出した一つのチケット。それは遊園地の一日フリーパスであった。

目を点にした彼女を見て満足そうな顔をした望子は腰に手を当て、大笑いする。

「おー……っほっほっほっほ！アツアツのお二方にはお似合いのボーナスですわ！御鐘望子は雅に去りますわ！セバス、帰りますわよ！」

「中村です」

言うだけ言うと言望子はセバス（中村）を連れて歩き去っていった。

ぼつんとステージ裏に取り残された二人。

「モッチー心まで美人とか惚れるわ」

「惚れちゃいますね」



「んあああああああーっ！どうして！わたくしは！素直に翔様と奈央様を応援していると言えませんの！答えなさいセバス！」

「中村です」



「ジェットコースターイエエエエエエエエエエーっ！！」

「水しぶきイエ…がぼぼぼっ！」

「奈央ーっ!？」

しばらく後。そこには最後に水溜まりにぶち込まれるタイプのジェットコースタに乗っている二人が！

「ゴーカートイエイエイエイエエエエエエエーっ!!」

「マリ○カートエイエイエイエイイーイーっ!!」

そしてゴーカートに乗ってはしゃぐ二人が！

「観覧車はイエらない」

「はい」

そして観覧車で急に大人しくなる二人が!! 暴れると危ないからね！

「はあー。今日は遊んだなあ」

「はい、とつても楽しかったです! モッチーさんには感謝ですね」

「そうだな」

そう言つて肩を寄せ合う二人。はしゃいだせいなのか、二人きりで居るせいなのか、二人の体はほんのりと熱を持っていた。

自然と手が重なり、絡まり合う。

「今日は凄く楽しかった。またデートしような」

「翔さん、何もう終わった気ですか? まだイベントが一つ残っていますよ」

え、と翔が思った時にはもう遅かった。夕陽で伸びた二人の影が重なり合う。

長い沈黙。息を止めた二人。先に「ぷは」と息を吐いたのは奈央だった。

「えへへ。観覧車で好きな人と口づけするのは、夢だったんです」

口元を押さえながら、彼女は顔を赤くして言った。



「セバス!!今お二方は何をしていましたの!?! 双眼鏡を貸しなさいセバス!」

「中村です」



夜。

奈央は自分の部屋でぐったりしていた。彼女の記憶は遊園地を出たあたりからすっぽり抜けており、いつの間にか風呂を済ましてベッドに倒れこんでいる状態だ。

「やっちゃった…。翔さんに、口づけしちゃった…」

頭はふわふわ、視界はぐるぐる。壊れたレコードのように同じセリフを呟き続ける奈央は幸せそうに頬を緩めながら枕に顔をうずめる。

「翔さん大好きいえええーっ。えへへ」

翔さんも私の事を考えていてくれるのかな？奈央は幸せな気持ちで眠りについた。

「奈央大好きイエエエエエエエエエエエーっ！！」

なんだか遠くから叫び声が聞こえたような気がした。

『返す言葉もないぜヒヤツホー……ッ!!』

翌日の日曜日の朝。翔は見事に風邪をひき奈央に電話で連絡を取っていた。

ちなみに奈央はちつとも体調を崩してはいない。

「それじゃあ今から翔さんのおうちに行って看病しますね!」

『朝ごはんはおかゆでよろしく!!』

「アイサー!では後ほどっ!」

ピ、とスマホの通話を切った奈央。彼女はにたりと笑った後、台所の冷凍庫を漁り始めた。

「フフフ……この間の看病の約束の奴を冷凍していて正解でした……!」

そう言つて奈央が取り出したものとは……?

「では翔さんのおうちでクッキング、です!ではまずザルにお米をドン」

冷凍ごはんのエントリーだ!家庭的である奈央は余ったご飯を冷凍しているのでレ
ンチンごはんとは基本縁がないのである!

「そして冷凍梅干しもドン」

「奈央オ！そりやないよ！」

「こ、これはつい食べてしまったんです！別に味見ってわけじゃ……！」

「正直者イエエエエエエエエエエエー！ツッ！」

とまあ、そんなこともあったが。紆余曲折を経て二人は無事に食事を終えた。

「おうちデートしたくない!？」

「したいです！」

突然の翔の提案。それに奈央は快く乗る。そして彼女はにやりと笑った。

「じゃあまずはおうちの探検ですね！翔さんってエツチな本どこに隠してますか!？」

「言う訳ねーじゃんバーバーバーカ!!奈央のエツチ！」

「あ、じゃああるって事ですね！手始めにクローゼットでも漁ってみます！」

「おい馬鹿やめて！」

「あー！この雑誌の人すつごくおっぱい大きいですよ！」

「勘弁して欲しいぞイエエエエエエエエエエエー！ツッ！」

「イエつても私の手は止まりませんよ！風邪で弱っている今が翔さんの性癖を網羅する

チャンスです！いざー！」

ばさばさと本を漁る奈央と顔を真っ赤にしてタオルケットに蹲る翔。

「イヤー！やめて!!」

「へへへっ！やめてと言われてやめる女がいますかっ！」

その日、男の情けない叫び声が住宅街に響いたとか響かなかったとか。



「あのー…翔様はどうされましたの？今日はなんだか、萎びているような…」

「はいっ！私がたっぷり辱めました！」

「ええ…？」

次の日の学校では机に突っ伏す男子と困惑する巻き髪のお嬢様、あと顔をキラキラと輝かせた女子が居たそう。